

軍事・歴史・政治・経済研究紙

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

橋頭堡の重要性を知らない 政財界の日本のリーダー

砂上の楼閣を築く日本人

日本の政治家と中国人女性通訳のスクランダルがよく話題になる。日本の政治家の多くは、こうした美人中国人通訳にま...

この北京政府に莫大な金を貢ぎ、集られているのは、日本を筆頭に、台湾や香港であり、彼等もまた、日本人同様に、大陸に砂上の楼閣を築く国民である。では、砂上の楼閣を築いた後はどうなるのか。

総べて北京政府のものであり、うまい事を行って工場や学術施設を作らせ、それをタダでせしめるのである。これがかつて毛沢東は「元手いらす」と云った。

近代戦と犯罪組織の合従 古代の戦争と近代戦の大きな違いは、近代戦に於ては、資本主義の原理が戦争にも働いているという事である。特に近代戦に至っては、麻薬絡み、あるいは麻薬売買によって得た利益が、軍資金調達に主力を担っているという事である。麻薬によって得た金で高性能な武器を調達し、また麻薬によって敵兵を麻薬漬けにして攪乱し、あるいは軍機を低下させて将兵の士気を弱め、前線の戦闘部隊を肺抜けにさせると言う手が遣われる。これに伴って戦略的には、犯罪組織と戦争技術者の戦術側が合従し、連携し、それを企てる側とそれを阻止する側で激しい攻防戦が繰り返される。戦争を正攻法で戦った時代は、遠い昔の事である。したがって戦争を理解するには、戦術や戦略のみならず、むしろ戦争の中に「戦略」と言う次元の中で、近代戦の、こうした犯罪絡みの策略が既に組み込まれているという事である。

また前近代的な奇手をもつて、奇襲や奇略を用いると言う手法はあまり見られなくなってきた。こうした戦法が廃れ、近代戦に近づいた時期がいつの頃かと察すれば、それは太平洋戦争の頃に表面化していると言える。この頃から、情報戦は管理・分析の手法が表面化し、既に今日言う情報管理の必要性が浮き彫りになっている。しかしこの時代、日本はこうした現実の移り変わりの気付きが遅く、大戦末期の最後の最後まで、情報を管理しそれを分析すると言う観察の眼を開く事が出来なかった。

敗戦以降も、「何故日本が戦争に負けたか」と言う根本原因すら突き止める事が出来なかった。これに漸く気付いたのは、つい最近の事である。

世界の民族から言って、日本民族と言つのは、元々戦争の特異な民族ではない。戦いと言えば、正攻法をもつて、正々堂々と正面から四つに組合つた戦法を最も好む民族である。裏の裏をかき、背後に廻り込んで、策を用いたり、敵を薬漬けにし、これによって戦闘組織を崩壊させるような「汚い手」を遣う事を、あまり得意としな

い。パカの一つ覚えで、スポーツのようルールに素直に従い、それを厳守する規則優先の人種である。この事は、元々日本人が戦いを得意とする民族でない事を踏わしている。その最たる証拠が、専守防衛と言つてシベリアン・コントロール (civilian control) に貫かれた文民によって統制される管理・制御法である。

専守防衛とは、他を攻撃する事なく、もっぱら「守り」(但し現代の自衛隊法では「守死」は含まれない。命の危険を感じた場合、逃げても敵前逃亡とはならない。この点は旧陸海軍の軍規とは大きく異なる) によって自国を防衛する事を手段に用いるのであるが、その背後には先の大戦の軍部独走の反省から、軍隊の指揮権が文民によって統制される事を厳守し、武力行使を禁じた日本国憲法下における自衛隊のあり方を、このように定義する。しかしその背後に

は、政治の軍事に対する優位を定めた制度が歴然と顔を覗かし、軍部の政治への介入や独走を抑止するためのものであると定義されている。一口に文民統制と言えども、聞いて、婦女子や戦争を好まない平和主義者に独占された文民統制論で、犯罪組織と表裏一体となつて展開される近代戦を、こうした連中が中心となつて最後まで戦い抜く事が出来るであろうか。

根本問題は実には此処にある。むしろ最後まで戦い抜かれては困る反体制勢力の意図があり、激戦直前に万歳をする、見えざる者の手が隠されている事を、私たちは洞察しなければならぬのである。この図式を突き詰めれば、背後に流れる意図的な作爲からは、「亡国」という現実が、末尾に控えて

いると言つ事になる。すなわち、戦争の定義を、敵から攻め込まれて「負けない事」ではなく、敵の侵入を良くして、最初から「負ける事」と意識していると言つ理論であると言つ事が分かる。つまり専守防衛ならびに文民統制とは、民族の負けない境地を説くものではなく、敵を、我が陣中に招き入れて、侵略を良くし、思想的精神的に混血を作ると言う意図が隠れている事も、また事実である。したがってこうした思想的精神的侵略に侵された場合、日本人の思考は、これまでの連綿として貫かれた日本の精神的支柱が崩壊し、欧米に馴染み、横文字文化に侵蝕され、この混血流入によって、益々畸形的化される危険があるのである。

奇蹟を起こす『聖書』

(その四十四) 米国イオンド大学教授 普川和翁

日本人の意識の中には、多神教思想がある。「八百万の神」思考である。欧米人の意識は、ここが日本人の中途半端な無神論者とは大いに異なっている。フアンダメンタリスは「聖書」に書かれている「奇蹟」を、かつて地球上で実際に起つたと信ずる人が多い。ここに人文字たりとも嘘・偽りがあると

は思っていない。そして、「科学」という分野に自分の身を置きながら、「聖書」においては絶対的に事実であるとの底から信じる人が多い。

世の中一般の、有識者や科学者が彼等を批判しても、フアンダメンタリストたちはこれを一向に気にかけない。

彼等の信ずる主張は、「自然科学の法則と雖も、数学的帰納法から言えば、これらは帰納法とは大きく懸け離れた不完全帰納法による一時的な仮説ではないか。また一言で科学と言つが、今日の科学は、不完全帰納法の、単に証明に過ぎず、自然科学の実験は不完全帰納法の最たるものではないか」と一蹴す

ると言つ事になる。すなわち、戦争の定義を、敵から攻め込まれて「負けない事」ではなく、敵の侵入を良くして、最初から「負ける事」と意識していると言つ理論であると言つ事が分かる。つまり専守防衛ならびに文民統制とは、民族の負けない境地を説くものではなく、敵を、我が陣中に招き入れて、侵略を良くし、思想的精神的に混血を作ると言う意図が隠れている事も、また事実である。したがってこうした思想的精神的侵略に侵された場合、日本人の思考は、これまでの連綿として貫かれた日本の精神的支柱が崩壊し、欧米に馴染み、横文字文化に侵蝕され、この混血流入によって、益々畸形的化される危険があるのである。

資本主義と言つて欧米産物の政治システムは、今後も益々猛威を振るうであろう。しかしこの産物の中には同時に犯罪組織も同居し、我々の社会に隣接して、次なる近代戦の虎視眈々とした決れ多部分を狙い撃ちする策動が隠されていると言つ事を忘れてはならない。

中国に対する認識の欠如 日本人の中国に対する認識の欠如は甚だしいものがある。そしてその要因を作つたのは、日本人が終戦直後の飢えと、生活苦に苦しんで居た時の、中国での大変動とその時期が同じくする事に重なっているようだ。この為、日本人は中国を正しく認識する目を失ってしまった。

一九四五年八月十五日から一九四九年にかけて日本は飢えと生活苦に喘いでいた。敗戦の痛手から立ち直れず、誰もが貧困に苦しんでいたのである。(独眼竜)



イスラム諸国の介入によって解放された東西パイルート

『聖書』は神の預言 自然科学の実感や観測は、全ては不完全帰納法による結果に過ぎず、科学万能主義の現代にあつても、これまでの実験や観測結果は、あくまで「仮説」の範囲を一步も出るものではない。フアンダメンタリストの主張を覆す科学者が、アメリカでは少ないのも事実であるし、彼等を否定する集団や、これに抗議を企てる団体は一つもない。

歴史を工学的に科学する

〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13 (尚道館ビル2F) 九州科学技術研究所 093(962)7802 FAX093(961)8224 Eメール: science@daitouryu.com



九州科学技術研究所 Kyushu technology Institute

九州科学技術研究所 URL http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/ 大東流霊的食養道HP www.daitouryu.com/syokuyou/ 癒しの杜の会HP www.daitouryu.com/iyashi/